

FOCUS Next



エリア完結の医療を使命に100年 泌尿器科医療で地域の中核を担う

野澤 英雄 先生 日本赤十字社 水戸赤十字病院 院長 (茨城県水戸市)

2023年に創立100周年を迎えた日本赤十字社 水戸赤十字病院は、水戸市を中心とする県央地域の医療を支え続けてきた中核病院の一つです。泌尿器科では低侵襲治療の標準治療化を見越して腹腔鏡手術やロボット支援手術にいち早く着手するとともに、若手医師の教育にも注力し、地域における泌尿器科医療のレベルアップに貢献しています。

手術のスタンダード化を見据え 保険適用直後にロボット支援手術を開始

10年で累計1,000例を達成

水戸赤十字病院は1923(大正12)年に「日本赤十字社茨城支部病院」として開設。以来、時代によって変化する医療ニーズに対応しながら、地域に根付いた市民病院的な役割を果たしてきました。同院院長の野澤英雄先生は、同院が立地する県央地域の特性について次のように説明します。

「大学病院がない地域なので医師の確保が難しいです。一方で県庁所在地を抱えているため医療需要は高いのですが、アクセス面の不便さもあって大学病院のある県南地域への流出が少なく、このエリアで医療を完結したいという患者さんのニーズが高い。当院に限らず、近隣の急性期病院もその思いに応えなければならないという使命感を持って、診療体制の強化に臨んでいると思います」

同院の特徴の一つは、茨城県のがん診療指定病院としてがん診療の充実を図り、年間1,000人以上のがん患者の治療に当たっていることです。中でも外科、産婦人科、泌尿器科の領域では地域でもトップクラスの実績を誇ります。そして、ロボット支援手術をその黎明期から開始するなど、泌尿器科のがん診療をけん引してきたのが野澤先生です。手術支援ロボットの導入は医師確保や集患も目的の一つですが、それ以上に同手術が近い将来、スタンダードの手術になり得ると考えたからだと言います。

「2000年代前半に手術支援ロボットをテストドライブする機会があり、難易度は高くないものの精密な操作が可能であることを体験しました。いずれは標準治療になると思い、また自費でも低侵襲の同手術へのニーズは高いと

判断し、保険適用の数年前から導入を病院に打診し続けたのです」と野澤先生は振り返ります。実際の導入は前立腺がんに対する全摘除術で保険適用された2012年の翌年ですが、県央地域では初、茨城県では2番目に早くロボット支援手術を開始しています。

医療に“神の手”は要らない

ロボット支援手術を積極的に展開しようとした背景には、腹腔鏡手術よりも質の平準化が図りやすいという点も挙げられます。同科ではロボット支援手術を導入する以前、腹腔鏡手術による前立腺全摘除術を県内で初めて実施し、泌尿器科領域におけるがん治療の低侵襲化に先鞭を付けてきました。腹腔鏡手術は開腹手術に取って代わる術式として普及・定着していますが、腹腔鏡下での繊細な技術が求められることから、誰もができる手術ではないと野澤先生は話します。

「手術ではよく“神の手”や“匠の技”ということが言われ、患者さんもそれを良しとする風潮がありますが、半面、施設や医師に対して不安を招く一因になっています。そういう職人技的なものをなるべく排除して、一定水準に達している医師なら誰でも行えるようにする、それがめざすべき医療の姿です。医師間や施設間の技術格差を埋めることで、患者さんの安心感にもつながりますし、その有力なツールの一つが手術支援ロボットだと考えています」

泌尿器科で始まったロボット支援手術は現在、外科、産婦人科でも行われています。手術件数も年々増加しており、100周年を迎えた2023年2月には累計1,000症例を達成しました(2024年3月31日時点で累計1,201件)。同院では県内における同手術の先駆者として適応分野をさらに広げていく方針です。

紹介元や患者さんの意識変革を促し 病診連携による働き方改革をめざす

患者増で外来診療が深夜に及ぶことも

水戸赤十字病院の泌尿器科は野澤先生が赴任した当時、がん患者はほとんどおらず、外来患者数は1日30人ほどだったそうです。野澤先生は専門の一つである不妊症の診療に取り組むとともに、同科を率いるようになってからは患者数が多かった前立腺肥大症の新規の治療法を相次いで取り入れ、診療体制の強化を図ってきました。経尿道的ホルミニウムレーザー前立腺核出術（HoLEP）は全国で数施設しか実施していない2003年から開始しています。

「HoLEPの導入も前立腺肥大症手術の中心になると考えたからです。患者さんに治療法を選んでもらう際に当科でできる治療法だけを薦めても説得力がないので、外科的な治療法に関してできるものは全てそろえました。結果として患者数も急増し、前立腺肥大症などの疾患を診ていく中で前立腺を中心とした泌尿器がんの患者さんも増えていき現在に至っています」と野澤先生は説明します。

一方で患者さんの急増に伴い、外来がスムーズに稼働できなくなっているため、喫緊の課題となっているのは病診連携の推進などによる働き方改革への取り組みです。野澤先生は手術や病棟業務に加え、1日100人ほどの外来患者を診療しており、診療時間が深夜に及ぶことも珍しくないと言います。

「前立腺がんをはじめとした手術件数の増加で術後経過観察の患者さんが蓄積されている状況です。泌尿器科のがんの多くはPSA高値や血尿などの理由により診断が付かない状態で紹介されてきますので、当院での診断・治療後にクリニックへ戻るというケースは多くありません。紹介元のかかりつけ医の先生方もがんの診療や経過観察は避けたいという気持ちが強い上に、患者さんも当院での治療継続を希望される方が多いのです」と実情を明かす野澤先生。今回の医師の働き方改革という好機を利用して、これまでも何度かトライしてきた病診連携の基盤整備を前進させていく考えです。

地域で医師を確保・派遣できる病院に

泌尿器科では研修医や若手医師の教育にも力を注いでいますが、来年度は同院の初期研修を受けた2人の医師がそのまま残り、同科が参加する後期研修プログラムに進みます。「泌尿器科のプログラムは大学病院とタイアップして行われるのが基本ですが、研修期間4年のうち大学病院で1年間すごせば、残りの3年間は当院での研修が可能というものです。大学病院がない分、このエリアで働きたいという医師たちを最初の段階から教育できる位置付けの病院にしていきたいですし、2人の研修医が残ることでその道筋が見えてきました。東北地域の病院から医師派遣の依頼があったりしますが、いずれはその要請にも応えられるようにしていきたいと思います。当科も人員が増えれば各医師のキャリアやポストを考えていく必要があるので、医師派遣はその観点からも重要です」と野澤先生は今後を見据えます。

「一般企業でも100年間続くのはほんの一握り。歴代の先生たちが積み上げてきた地域からの信頼や、新しいことに挑戦して前進していこうという心構えがなければ継続できなかったと思います。そういった気持ちや姿勢を後世につなげていくことが今後も変わらない私の使命です」

地域で医療を完結したいという住民のニーズに応えるため、最新治療・技術を積極的に取り入れてきた水戸赤十字病院。野澤先生はこれからの100年に向けて決意を新たにしています。



創立100周年記念で企画されたLuckyFM茨城放送のラジオ番組「水戸戸赤の今日もおだいに」に出演し、地域医療への思いを熱く語る野澤先生。(野澤英雄先生提供)

★POINT★

- 地域内で医療を完結したいというニーズに応えるため、最新治療・技術の導入で診療体制の強化を図る。
- ロボット支援手術を早期に開始し、100周年を迎えた2023年に累計で1,000例に到達(2024年3月31日時点で累計1,201件)。
- ロボット支援手術は施設や医師の技術格差を埋め、医療の平準化を促すツールになる。
- 患者増による時間外労働の解消に向け、病診連携の推進などで働き方改革の実現をめざす。